年長児における恐怖と対処行動との関連

○中井康太郎¹・内山伊知郎²

(¹同志社大学大学院心理学研究科・²同志社大学心理学部)

キーワード: 恐怖 対処行動 年長児

A relationship of fear and coping among older children

Kotaro NAKAI¹ and Ichiro UCHIYAMA²

(¹Graduate School of psychology, Doshisha Univ.,²Department of psychology, Doshisha Univ.)

Key Words: fear, coping, older children

目 的

幼児期における恐怖対象についての検討は多くなされているが、そのような恐怖感情はどのような行動を喚起するのであろうか。厚生労働省大臣官房統計情報部 (2013) によると、5歳から9歳にかけての最も高い死因となっている不慮の事故の原因のうち、最も高い割合となっているものが交通事故であり、次いで溺死の割合が高くなっている。しかし、幼児期の子どもに対する交通場面や水災場面における恐怖と行動について言及した研究は見られない。恐怖感情とこのような事故とは関係がないのだろうか。そこで本研究では、幼児期の子どもの恐怖と各場面での対処行動との関連を検討する。

方 法

実験参加者

保育園に通う年長児 59 名 (男子 24 名, 女子 35 名, 平均年齢 6.21 歳, $SD=0.27$ 歳)。

課題

4つの場面を設定し、各場面で例話を作成した。4つの場面設定を行うために、予備調査を行った結果、年長児において、他の項目よりも出現率が有意に高かった“空想”、“生物”、“環境”の項目から、項目数が多く対象を絞りづらいと判断した“生物”項目を除く“空想 (お化け)”と“環境 (暗闇)”の2種類の項目を場面に設定した。それに加えて、実際の事故原因とされる交通場面と水災場面との計4場面を設定した。

手続き

各4場面の例話を用いて、参加者に対して恐怖の程度とその場面での対処行動とその理由を口頭で質問し、記録した。

得点化

恐怖の程度については、3件法 (0:全く怖くない, 1:少し怖い, 2:とても怖い) で評定させた。また、各場面の対処行動について、その対処行動の理由をもとに分類を行った。

結 果

各場面における恐怖の程度と対処行動との関連をフィッシャーの正確確率検定を用いて分析した結果、空想場面と交通場面でのみ、有意な関連が見られた ($p<.05$)。

表1 恐怖の程度における対処行動の種類との人数比較 (空想)

	逃走的 対処	闘争的 対処	求援的 対処	社交的 対処	対処 なし
怖くない	1	5	2	2	2
少し怖い	3	2	2	1	5
とても怖い	17	3	3	0	11

表2 恐怖の程度における対処行動の種類の人数的比較 (交通)

	逃走的 対処	停止的 対処	求援的 対処	対処なし
怖くない	8	4	0	1
少し怖い	9	2	2	11
とても怖い	14	0	1	7

表1と表2はそれぞれ空想場面と交通場面での、恐怖の程度において、各対処行動を取った人数を示した表である。空想場面と交通場面の2場面において、残差分析を用いて3段階の恐怖の程度間での各対処行動選択者数を残差分析で比較したところ、空想場面においては、“怖くない”と報告した参加者は、逃走的対処 (ex.逃げる) を選択した人数が有意に少なく、闘争的対処 (ex.やっつける) や社交的対処 (ex.仲良くなる) を選択した人数が有意に多く ($p<.05$)、また“とても怖い”と報告した参加者は、逃走的対処を選択した人数が有意に多かった ($p<.05$)。交通場面では、“怖くない”と報告した参加者は、逃走的対処を選択した人数が有意に少なく、停止的対処 (ex.立ち止まる) を選択した人数が有意に多く ($p<.05$)、“とても怖い”と報告した参加者は、停止的対処を選択した人数が有意に少なかった ($p<.05$)。

考 察

各場面における恐怖の程度と対処行動との関連を分析したところ、空想場面と交通場面の2場面でのみ、恐怖と対処行動との関連が見られた。また、この2場面についての下位検定の結果、恐怖の程度が低いと、逃げ出すことを選択する人数が少なく、様々な対処をとることが可能となることが示唆される。しかし、恐怖の程度が高いと、逃げることを選択したり、恐怖の程度が低ければ取れる対処を取れなかったりということが示されている。このことから、交通場面では恐怖の程度の高さと、安全な行動には関連が見られるということが示唆された。しかし、今回の研究では恐怖と対処行動の因果関係を検討していなかったため、今後、その検討が子どもの安全な対処を考えることに重要であると考えられる。

引用文献

厚生労働省大臣官房統計情報部 (2013). 平成 24 年人口動態調査上巻死亡第 5.31 表 不慮の事故の種類別にみた年齢別死亡数. e-stat 2013 年 9 月 5 日
<<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/Csvdl.do?sinfid=000022220085>> (2013 年 12 月 10 日)